SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

第22回静岡大学技術報告会を迎えて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学技術部 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊東, 幸宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010238

巻頭言

※ 以下は報告会当日の学長挨拶を文字に起こしたものである

第 22 回静岡大学技術報告会を迎えて

学長　伊東幸宏

皆さん、おはようございます。静岡大学学長の伊東でございます。今日は技術報告会、今年で 22 回ということでございます。年 1 回の開催ですから 22 年間、こういうことを毎年継続して行くということは大変重要なことだと思います。22 回の回を重ねる報告会にするためには報告する内容、技術を磨いていくこともやっていく必要もあるわけですから、そういうことも含めて 22 年間続けてこられたことに敬意を表したいと思います。22 年というのは人間でいうと生まれてから大学を卒業する位までの年月が経っているということですね。人間でいうとここで社会に出て、大きく羽ばたく時期ということになります。是非この技術報告会も、またこの 22 年を一つの節目として一段と大きく成長して欲しいというふうに思っております。

今、大学全体というのが運営費交付金をギリギリギリ引かれて、それに伴って人件費も抑えて行かなければならないという状況で、教員も事務職員も、そして技術職員も人数が少し減ってくるという状況にあります。こういう中で 22 年目の再スタートと、大きく羽ばたく一歩ということを考えるときに、仕事の中身というか、質を考える時期に来ているのではないかというふうに思います。技術部になってから今年で 5 年経つわけですね。昔は技術職員というのは教員の教育研究の補助的な役割というのを担ってきたというふうに思っていますけども、でもこれからというのは、大学の全体の中でどういう技術を培っていかなければいけないのか、大学が内部にどういう技術を有している機関でなければいけないのかということを考えた上で、それに必要な技術者集団として技術部が存在するというような形になっていかなければいけないのではというふうに思っております。例えば、今年、会計検査院に共同利用機器の利用状況が少し足りないのではという指摘、これ静岡大学も受けましたし、全国の大学、結構多くの大学がそういう指摘を受けました。共同利用を進めようとすると、そういうところをしっかりサポートするスタッフというのが必要になってきます。そういうふうな形を大学の中で培っていかなければいけない技術というのは色んな方面に渡りますし、これから全体で人が減っていく中で、こういった技術を磨いていくということは益々重要になってくるというふうに思っているところです。そういうことを考えて仕事の中身を変えて行こうとすると、仕事が増えたなと、大変になったなと、というように感じることになるのではないかと思うのですが、しかし、それはある意味で技術部の存在価値が高まったのだというふうに考えて頂けたら嬉しいなというふうに思っております。そんなような形で 22 年、人間でいうと大学を卒業するという歳を一つの節目として、大学の中にどういう技術が必要なのか、どういった技術者集団が必要なのかをもう一回考えるそういう時期に来ているのではないかというふうに思っております。

最後になりますけども、私今年で学長をようやく卒業できると、7 年目になりますが、あと

99 日になります。私が学長をやってきた 7 年の間に技術部も、前の碓氷理事の時ですね、技術部の形に変えるということを踏み切って頂きましたし、電研やグリーン研も改組に伴って、先程触れた機器の共同利用みたいなことも大学全体で進めてきました。そうゆうことに技術部の皆さんの多大な貢献があったというふうに思っています。本当に感謝しております。来年からは次の石井学長の下で、石井学長をしっかりサポートして、静岡大学をこれからも支え続けて頂きたいということをお願いいたしまして、私の今日の挨拶とかえさせて頂きます。どうもありがとうございます。